

■（27）大震災のデマから考える「必修科目」

東日本大震災の翌朝だった。妻と息子3人の携帯電話のメール受信音が次々と鳴った。メールを開くと「有毒ガスが雨とともに降ってくる…」のデマの文面が飛び込んできた。被災した千葉県の製油所の火災をネタに、不安をあおるチェーンメール。官房長官はすぐに「いたずらに不安をあおる。」と非難し、デマメールの転送をやめるように訴えた。

残念ながら、天変地異の時には不安をあおるデマが流れる。1923年の関東大震災では「朝鮮人が暴動を起こす」とのデマが流れ、逆に多数の朝鮮人が虐殺された。1995年の阪神大震災でも、大地震の再来や仮設住宅の入居者選定をめぐる流言が広がった。

情報が飛び交う社会では、各人が情報の発信源を確かめ、正しいかどうかを判断しなくてはならない。信頼できるメディアかどうかも重要な要素。より多くのメディアから情報を得て、比較するのも有効な方法だ。学校で学ぶ「メディアリテラシー」の実践だ。

記者の世界でも鉄則があります。情報の真偽を確かめるには、情報を知りうる複数の人に確認することです。IT世代の子どもたちには「必修科目」かもしれません（山）